

# ヴェニゼロスと近代ギリシャにおけるイレデンティズム

—英文による先行研究のレビュー—

佐藤 良樹

## 概要

ギリシャでは、ナショナリズムによる国家統合を企図したにもかかわらず、第一次世界大戦という国際危機に直面した結果、社会的分断を経験した。これは「エスニコス・ディハズモス」(国民的分断)と呼ばれ、ギリシャ政治と社会に長く影響を及ぼした。この「エスニコス・ディハズモス」で重要な役割を果たした人物の一人が、近代ギリシャ政治最大の政治指導者と言われる政治家エレフセリオス・ヴェニゼロスであった。

ヴェニゼロスがしばしば推進しようとした領土拡張政策の背景には、「メガリ・イデア」(大理念)があった。本稿では、ヴェニゼロスと「メガリ・イデア」の関係を分析する際に、「イレデンティズム」に関する諸研究の示唆を組み合わせた視角を構築した。この視角を用いて、英文による先行研究を整理した。

先行研究を整理した結果、ヴェニゼロスは、相互に矛盾する意見が表出する複数の政治空間で活動しながら、領土拡張政策を推進していたことが明らかになった。そして本稿では、ヴェニゼロスは各政治空間に対応する政治指導者の「顔」を複数有していたことを示す。最後に、ギリシャにおける政治的ダイナミクスの解明には、各政治空間の相互関係を解明できる視角を設定する必要があるという今後の研究課題を明らかにする。

## 1. はじめに

### 1.1 問題意識と本稿の目的

ギリシャは1909年から1923年にかけて、民主化と度重なる戦争を経験した。この過程において、常に中心にいたのが政治家エレフセリオス・ヴェニゼロス(1864-1936)である。ヴェニゼロスは、当時オスマン帝国統治下にあったクレタ島で商人の家に生まれた。アテネ大学法学部を卒業後、故郷のクレタ島で弁護士として開業し、ギリシャ本土との統合を求める運動の中心人物となった。ギリシャ首相に就任後は、政治改革を進め、バルカン戦争でギリシャを勝利に導いた。第一次世界大戦の参戦をめぐることは、中立政策を主張する国王コンスタンディノス一世と対立しながらも、連合国側での参戦を主張し臨時政府を樹立した。第一次世界大戦後のパリ講和会議では戦勝国の政治家として参加し、領土拡張を「一時的」にせよ達成した。

ヴェニゼロスが推進した領土拡張政策の背景には、「メガリ・イデア」(Μεγάλη Ιδέα、日本語で「大理念」の意)があった。「メガリ・イデア」は、1844年からギリシャにおける主要な政治的ビジョンであり、ギリシャ国家の領土を拡張することで、オスマン帝国のすべてのギリシャ人を包摂し、政治的に統合するというものであった(村田2012:75)。1830年に独立したギリシャ国家の境界線はヨーロッパの列強によって画定されており、「民族の分布」や「歴史的な領土」と一致していなかった。このような国家形成の過程において、ギリシャは在外同胞や彼らの居住する土地の統合を目指し、国境線の修正を要求したのである。

1923年に小アジアにおけるトルコとの戦争でギリシャが敗北すると、「メガリ・アイデア」は主要な政治的ビジョンではなくなる。この戦争では、小アジアにおいて推計で一万二千人から三万人のキリスト教徒が殺害された(Gerwarth 2016=2019: 344)。その後、トルコとの大規模な住民交換が行われ<sup>1</sup>、小アジアに対するギリシャの領土的野心に終止符が打たれた<sup>2</sup>。しかし、ドデカネス諸島、北イピロス、キプロス島は依然としてギリシャにとって残された「未回収地」とされ、1974年の軍事独裁政権の崩壊まで「メガリ・アイデア」は断片的に存続した(Stouraiti and Kazamias 2010: 33)。

このように、「メガリ・アイデア」はギリシャにおける政治的ビジョンとして長く存在し、政治と密接な関係のもと、政治的ダイナミクスの一要因であった。前述のように、第一次世界大戦への参戦をめぐる政治対立では、連合国側での参戦を主張したヴェニゼロスと中立を主張した国王コンスタンディノス一世が対立し、ギリシャでは二つの政府が並立する事態となった。両政府は互いの政敵を粛清し、対立を深めていった。これは、「エスニコス・ディハズモス」(Εθνικός Διχασμός、日本語で「国民的分断」の意)と呼ばれ、戦間期のみならず第二次世界大戦からギリシャ内戦にかけて続き、ギリシャの政治と社会に長期的な影響を及ぼした<sup>3</sup>。

このような問題意識から、政治指導者ヴェニゼロスと「メガリ・アイデア」が具体化された領土拡張政策に焦点を当てて、英文の先行研究について整理を行う。それによって、ギリシャにおける政治的ダイナミクスを解明するための道を開くことが本稿の目的である。

## 1.2 アプローチ—政治指導者と政治空間

国際政治史の分野では、主要な政策立案者や政治指導者の行動の分析を通じて、当時の政治状況を解明しようとする研究手法がある(Trachtenberg 2006: 141)。本稿では、この手法

を用いて、政治指導者ヴェニゼロスに焦点を当て、彼を取り巻く状況を分析してみたい。

政治指導者は、国際政治空間と国内政治空間という二つの異なる政治空間に身を置いている。そのため、一方では国際政治の「現実」に即して行動し、他方では国内政治の「要求」を受けて行動することになる。政治指導者は、これら二つの政治空間で活動しながら、自身の思惑に沿う形で政策の形成・実施を行うことになる。政策は、国内社会で受容されている一連の価値観を反映した方法で、政治指導者によって組み立てられる傾向があるが、そのような政策には矛盾をはらんでおり、政治指導者はどこかで政治的リスクを負うことになる(Trachtenberg 2006: 153)。

## 1.3 本稿の構成

本稿では、まずヴェニゼロスと「メガリ・アイデア」の関係を分析する上で有用と思われる視角を提示した後、先行研究を整理し、考察を行う。次に、先行研究の考察結果に基づいて、ヴェニゼロスが相互に矛盾した意見が表出される複数の政治空間の間で領土拡張政策を推進していたことを明らかにする。最後に、今後の研究課題として、複数の政治空間を架橋し、それらの相互関係を解明できる視角の確立が必要であることを提示する。

## 2. 分析視角

### 2.1 イレデンティズムとは何か

まず、ヴェニゼロスと「メガリ・アイデア」の関係を分析する上で有用と思われる視角を紹介する。それは、イレデンティズム(Irredentism)である。イレデンティズムとは、イタリア語の「未回収地」(irredenta)に由来する言葉であり、日本語では「失地回復主義」あるいは「未回収

<sup>1</sup> 住民交換では、宗教的基準をもって実施させ、トルコからギリシャへ約百万人のキリスト教徒が、ギリシャからトルコへ約四十万人のイスラム教徒が移送された。このギリシャへの移民の数は、当時のギリシャ国内人口の四分の一に相当するものであった(Gerwarth 2016=2019: 346-50)。

<sup>2</sup> その後のヴェニゼロスは、以前のような求心力を集めなかったものの、「難民」の定住化や世界恐慌への対応などで戦間期においてもギリシャ政治において重要な役割を果たした。

<sup>3</sup> 特に、政党システムや政軍関係などに強く影響を及ぼした(Kalyvas 2015: 71)。

地併合主義」などと翻訳される。その定義は、「既存の国家が自国と見なす領土や人々を『取り戻す』試み」とされる場合が多い (Chazan 1991: 140)。本稿でもこの定義を用いる。

イレデンティズムは、既存の国家によって主張されるものである。従って、非国家アクターによる分離独立運動とは異なるものである (Horowitz 1991: 10)。イレデンティズムを主張する国家の要求は、「救済すべき土地」の統合であるがゆえに、「民族的アイデンティティ」の繋がりを強調し、同胞を「取り戻す」運動を展開し、しばしば「祖国」の国名Xを伴う「Greater X」と称する (Ambrosio 2011)。

イレデンティズムとナショナリズムは、しばしば互換的に使われている (Ben-Israel 1991: 31-4)。そもそも両者にはどのような関係にあるのだろうか。スミスはナショナリズム研究を用いて、その関係の整理を試みたい (Smith 1986=1999, 2010=2018)。スミスは、「エトニ」という前近代に見られたネイションの前段階的な共同体の概念を提示した。エトニは、固有の名称、祖先などに関する共通の神話、共有された記憶、独自の文化、故郷との繋がりを、何らかの連帯感、という六点で構成される。これに対して、ネイションは、固有の名称、共通の神話、共有された歴史、独自の公文化、自覚された故郷における居住、共通の法と慣行、という六点で構成される (Smith 2010=2018: 36; 月村 2013b: 5)。

エトニのネイション化には、二つの道筋がある。第一の道筋である領域的ネイションは、「領域の感覚に基礎をもち、明確に線引きされた地理的な境界線内で相互行為の結果を、基礎としている」 (Smith 1986=1999: 159)。第二の道筋であるエスニック・ネイションは、「既存のエトニやエスニックな絆を基礎としつつ、徐々にあるいは断続的に形成され」、「血統、人民主義、習慣と方言、土着主義といった要素を強調」している (Smith 1986=1999: 162)。すなわち、領土的ネイションよりもエスニック・ネイションの方が、血統神話や歴史のような「神秘」的要素が色濃く、メンバーシップ的次元が優位な

ネイションである (月村 2001: 24)。この第二の道歩んできたナショナリズムの一形態に、イレデンティズムがあると言えるだろう。

## 2.2 イレデンティズム研究史

イレデンティズムには、国際政治空間や国内政治空間とどのような関係があるのだろうか。この関係を、イレデンティズムに関する研究を振り返ることによって整理してみたい。

まず、イレデンティズムを国際関係と政治発展の相互関係に結びつけようとしたウィーナーによる研究が挙げられる (Weiner 1971)。彼は、イレデンティズムに起因する政治現象の特徴をまとめ「マケドニア・シンドローム」と表現した<sup>4</sup>。しかし、ウィーナーの研究は、その現象を説明してはいるものの、国家が同胞との統合を積極的に推進する要因や条件については言及していない。

イレデンティズムに関する研究の多くは、国際政治空間に焦点をあて、国際規範や制約との関係を分析している。マクマホン、国内政治についても考慮はしているものの、国際的な制約の方がより重要であると主張した (McMahon 1998)。また、アンブロシオは、国際的な圧力があることによって、イレデンティズムは殆ど成功しないとしている (Ambrosio 2001)。さらに、コルンプロブストは、国際規範がイレデンティズムを抑制する上で重要な役割を果たしていることを解明している (Kornprobst 2008)。

国内政治空間に焦点を合わせた研究は、数は少ないながら次のようなものがある。チェイザンは、政治指導者がイレデンティズムの推進を決定する際に国内政治で重要な役割を果たしていることを指摘した (Chazan 1991)。一方で、ホロウィッツは、国内政治のバランスが崩れることを恐れて、政治指導者がイレデンティズムを抑止する可能性について言及している (Horowitz 1985)。

また、イレデンティズムによる危機は、他の国際危機と比較して暴力的な傾向があり、戦争に発展する可能性が最も高い (Carment and

<sup>4</sup> 「マケドニア・シンドローム」として、十六個の政治現象の特徴が挙げられている。例えば、イレデンティズムを推進する国家は、国境線の修正を求めるために、国際的あるいは地域的な勢力均衡を脅かすような国家との同盟関係を結ぼうとすること、イレデンティズムが他の公共政策よりも優先される場合、軍隊が国内で権力を握る傾向があること、などである (Weiner 1971: 670-83)。

James 1995)。そして、イレデンティズムは、その成否に関わらず、国内における世論の分裂を引き起こす可能性も高い。なぜなら、イレデンティズムの追求は、戦争による死傷者の増加、新たに統合された領土との経済格差、地域主義の台頭、他の少数民族問題につながるからである (Chazan 1991:144-9)。以上のことから、イレデンティズムの推進は、政治指導者にとっては避けるべき政策といえるかもしれない。しかし、政治指導者はしばしばイレデンティズムを推進する。どのような場合に政治指導者はイレデンティズムを推進するのであろうか。政治指導者がイレデンティズムを推進する政治的環境は、次のように考えることができる。

## 2.3 イレデンティズムと政治指導者

まず、国家建設政策と民主化政策の相互関係に関するリンズとステパンの研究によれば、同胞が領土の外に住んでいる場合、イレデンティズムを推進しなかった政府は、民衆から支持を失っていくことになる (Linz and Stepan 1996: 26)。その結果、より過激なナショナリストが社会に台頭することになり、イレデンティズムに基づいた政治は民主化に負担をかけることになる (Linz and Stepan 1996: 26)。ギリシャは、イレデンティズムが民主主義の「質」に影響を与えた典型的な例であった (Linz and Stepan 1996: 136)。

ただし、多数の在外同胞が存在するからといって、政治指導者は必然的にイレデンティズムを推進するわけではない。政治指導者には、「何もしない」、「同胞のための外交政策をとる」、「戦争」という三つの政策オプションがある (Saideman and Ayres 2008: 2)。これらの選択には、在外同胞や領土拡張の過程で発生する「難民」が、政治指導者にとって権力闘争の「道具」の一つとして利用できるかどうかにかかっている。そして、政治指導者は短期的にでも利益を得るのであれば、自国にとって非常にコストのかかる政策でも実施する (Saideman and Ayres 2008: 12)。また、多数代表制の選挙制度の導入による政治的「競争性」の向上は、政治指導者が支持や人気を得るための方法としてイレデンティズムを推進することも指摘されている (月村 2013a: 14; Skiroky and Hale 2017:

122-3)。

以上を踏まえると、政治指導者がイレデンティズムを推進するか否かは、国際政治空間の動向を見据えつつ、国内政治空間における権力闘争をいかに勝ち抜くか、民衆からの支持をいかに集めるかにかかっていると言える。本稿では、国内政治空間を、権力闘争が行われる「政治エリート空間」と、政治指導者が民衆からの支持獲得を試みる「民衆運動空間」に区別する。その上で国際政治空間と合わせて三つの政治空間において、ヴェニゼロスと「メガリ・イデア」の関係を捉え、ギリシャの領土拡張政策に関する先行研究を整理する。

## 3. 先行研究

### 3.1 国際政治空間

#### 3.1.1 大国の帝国主義政策

国際政治空間を対象とする研究として、まずヴェニゼロスの外交政策と大国、特にイギリスとの関係に関するルエリン＝スミスの研究がある (Llewellyn-Smith 1998, 2006)。

ヴェニゼロスの外交政策は、イギリスとの関係を意識して形成されていた。1912年12月、ヴェニゼロスは第一次バルカン戦争の講和を巡る外交交渉のためにロンドンに到着し、財務大臣ロイド・ジョージ、海軍大臣ウインストン・チャーチルと会談した。この会談の内容は、次の二点にまとめられる。第一に、キプロス島をギリシャへの譲渡する代わりに、ケファロニア島にイギリスの海軍の施設を設置することであった。第二に、イギリスから軍艦を購入することであった。この交渉で、ヴェニゼロスは、ロイド・ジョージの東地中海情勢に対する認識から影響を受け、イギリスに追随する外交方針を形成した (Llewellyn-Smith 2006: 148-9)。

1910年から1923年までのヴェニゼロスの外交政策の実施には、四点の問題が存在した。まず、第一次世界大戦への参戦を巡る国王コンスタンディノス一世と参謀本部の反対がある。次に、ギリシャの外交政策に対するイタリアの干渉が影響した。そして、大国間の政治であり、特にアメリカの動向が重要な要因であった。最

後に、貧困と国内経済に起因する問題があった (Llewellyn-Smith 2006 : 177-8)。

### 3.1.2 大国の干渉

次に、大国の干渉がギリシャの国内政治と外交政策に与えた影響を分析した研究がある。クルビスらは、ギリシャ国内政治に対する大国の干渉の歴史を通して、ギリシャの外交政策のジレンマを指摘している (Couloubis, Petropoulos and Psomiades 1976)。

ギリシャが抱えていたジレンマとは領土拡張を達成しようとするれば、財政的・軍事的な分野で大国に依存せざるを得ないというものであった。財政的依存度の増大については、1897年の対オスマン帝国戦争の敗北後<sup>5</sup>、ギリシャの国家財政が債務履行と賠償金の支払いのために大国六カ国からなる国際財政管理委員会の監督の下に置かれたことが背景にある。これは、ギリシャの武器輸入先を制約することになった。そして、軍事的依存度の増大である。バルカン戦争後の領土拡張は、ギリシャに安全保障上の問題をもたらした。獲得した領土は余りにも広大で、ギリシャの国境線も延長された。その結果、ギリシャは自国の安全保障を軍事的に大国に依存せざるを得なくなったのである (Couloubis, Petropoulos and Psomiades 1976 : 152-3)。

### 3.1.3 外交政策決定者間の対立

第三に、第一次世界大戦への参戦をめぐるギリシャの政治指導者の動機や選択に焦点を当てたレオン (レオンタリテイス) の研究がある (Leon 1974, Leontaritis 1990)。レオンは、各国の外交資料を調査し、ギリシャの外交指導者の国際政治空間に対する認識について分析した。そこで浮かび上がってきたのは、外交政策決定の過程において、政策決定者の中で領土拡張の達成方法に違いが生じ、ギリシャの中立政策を動揺させていたことである (Leontaritis 1990)。

ヴェニゼロスは、1914年8月にオスマン帝

国との戦争が遅かれ早かれ勃発すると予想し、連合国側での参戦を計画した (Leon 1973 : 33)。ヴェニゼロスの外交政策は、大国の帝国主義が支配的な国際政治と、ギリシャがこれまで推進してきた領土拡張政策の双方に適合していた (Leontaritis 1990 : xi)。

参戦を主張するヴェニゼロスに対して、参謀総長イオアニス・メタクサスが対立することになった。メタクサスは、ギリシャ陸軍士官学校卒業後、ベルリン軍事アカデミーに留学したドイツ留学組の軍人であり、ドイツの勝利を微塵も疑っていなかった (Leon 1974 : 69)。1909年のクーデター以後のヴェニゼロスによる改革は、メタクサスのような「親ドイツ派」の軍人との対立を形成した。第一次世界大戦への参戦に反対した参謀の多くは、ドイツ留学組の「親ドイツ派」の軍人であった (Leon 1974 : 77-8)。

## 3.2 政治エリート空間

### 3.2.1 政軍関係

政治エリート空間を対象とする研究として、まずギリシャにおける政軍関係の歴史を分析したヴェレミスの研究がある (Veremis 1997, 2006)。ヴェレミスは、主要な軍人と政治家のアーカイブや二次資料を用いて、ギリシャにおける政治構造の変動の中に軍人の動きを位置づけている。このアプローチを通じて、軍隊の組織とイデオロギーの変遷、軍隊の政治における行動様式の変化を通して、ギリシャにおける政治と社会の変容を解明している。

ヴェレミスによれば、1909年から1935年までのギリシャにおける軍の政治への介入には、二つのカテゴリーがある (Veremis 2006 : 273-4)。すなわち、国民的な支持に依るものと、物質的な利益に基づく関係であるクライエンテリズムに依るものである<sup>6</sup>。

クライエンテリズムの変化は、ギリシャにおける軍の再編成と関係していた。ヴェニゼロスはギリシャ首相に就任後、軍の近代化を図った。

<sup>5</sup> ヴェニゼロスがギリシャ首相になる以前、1897年にギリシャは領土拡張を目指して、オスマン帝国に単独で戦争を仕掛けた。しかし、ギリシャはこの戦争に惨敗することになり、オスマン帝国に対する多額の賠償金を背負うことになった。

<sup>6</sup> 本稿で取り上げた研究には、パトロン＝クライアント関係、パトロネージ、クライエンテリズムなどの類似した用語が使われている。政治学の発展に伴い、これらはクライエンテリズムの概念によって統一的に説明されるようになった (小林 2008 : 5)。本稿でもそれに倣い、クライエンテリズムに統一して使用する。

ヴェネゼロスがギリシャ政治に登場する以前のテオトキス政権下では、ドイツ式でのギリシャ軍の強化を目指していた (Dakin 1962 : 43-60)。この流れに対して、ヴェネゼロスは陸軍をフランス式、海軍をイギリス式で強化しようとした。これは、ギリシャ軍内におけるクライエンテリズムの流動化につながった。軍での昇進は、個人的な人脈に頼らなければならなかった。従って、クライエンテリズムの流動化は、軍人の新たなパトロンの模索につながった。軍におけるクライエンテリズムは、指揮系統の規律に悪影響を及ぼした (Veremis 2006 : 274)。

ヴェネゼロスの領土拡張政策の推進によって、実際に最前線で戦う軍人との協力関係が不可欠であった。そのため、「エスニコス・ディハズモス」においては、臨時政府で任務についた将校に対しては、短期間での昇進など優遇制度を導入した (Veremis 2006 : 275)。「エスニコス・ディハズモス」後の1917年から1920年にかけて、軍におけるクライエンテリズムが固定化され、ヴェネゼロス派と反ヴェネゼロス派の二極化が進んだ<sup>7</sup>。

### 3.2.2 社会構造

クライエンテリズムは軍の内部のみならず、ギリシャ社会全体に存在していた。ギリシャの社会構造の分析を行っているムゼリスの研究によれば、工業化が進んでいなかったことで、地主とブルジョアの間に深刻な対立はなく、クライエンテリズムの垂直的ネットワークが、ギリシャにおける国家と社会の連繋の基盤となっていた (Mouzelis 1986 : 76)。

第一次世界大戦の前後に、ギリシャではクライエンテリズムが「変化」した。一般的に、政治発展に伴って、クライエンテリズムは伝統的クライエンテリズムから政党指向型クライエンテリズムに移行する。伝統的クライエンテリズムは、「地方名望家」を中心とする対人関係の連鎖を基盤としている。一方で、政党指向型クライエンテリズムは、政党が国家の有する公的資源にアクセス／依拠した便益の供与に関わるものである (Mouzelis 1986 : 76-7 ; 藤嶋 2014 :

151)。しかし、ギリシャにおけるクライエンテリズムは、ヴェネゼロスと国王コンスタンディノス一世の政治対立の中で、対人関係を基盤とするクライエンテリズムの再生産が促され、クライエンテリズムの「変化」にとどまったのである (Mouzelis 1986 : 81-2)。

### 3.2.3 社会的亀裂

マヴロゴルダトスは、クライエンテリズム、カリスマ、社会的亀裂の三つの分析枠組みを用いて、「エスニコス・ディハズモス」の分析を行っている (Mavrogordatos 1983)。この研究によって、ヴェネゼロスと国王コンスタンディノス一世という二人のカリスマ的指導者の対立が、ギリシャ政治と社会の二極化に発展した背景を明らかにした。

マヴロゴルダトスは、ギリシャにおける社会的亀裂の実際を四点に整理した。まず、独立当初の地域に住む「先住民」と新たに統合した地域に住む「新住民」である。次に、裕福な地域と貧困地域である。そして、農地改革による新旧の小自作農である。最後に、バルカン戦争以前と以後の「旧領土」と「新領土」の住民である (Mavrogordatos 1983 : 99)。これらの社会的亀裂は概念的には区別できるものの、相互に関連しあい、ヴェネゼロスと国王コンスタンディノス一世という政治指導者のカリスマとクライエンテリズムと共にギリシャ政治に作用していたのである (Mavrogordatos 1983 : 100)。

### 3.2.4 政体の論争

ギリシャは1909年から1924年にかけて君主制から共和制へ移行した。1909年のクーデターの時点では、共和制への移行は重要な争点ではなかったが、1924年の新憲法の制定を経て共和制へ移行することになった。パパコズマは、1909年から1924年の政治的変遷をたどることで君主制が政治的争点となった背景を分析している (Papacosma 1977, 1981)。

そもそも、1909年のクーデターは、ギリシャの政体を変革するほどの強力なものではなかつ

<sup>7</sup>ただし、クライエンテリズムは、「エスニコス・ディハズモス」の時期を除いて、柔軟性があり、自分のパトロンから恩恵を享受できない場合、クライアントはパトロンを変更することができた (Veremis 2006 : 274)。

た。1909年の軍による改革の試みは、旧来の政治家と同様、保守的で効果がなく、共和制への移行は対象になっていなかった。そのため、ヴェニゼロスは王室との協調関係の構築を図り、円滑な政治改革を試みた (Papacpsma 1977: 169-70)。

しかし、第一次世界大戦への参戦をめぐる国王コンスタンディノス一世との対立そして1922年の小アジアでの敗戦を経て、国王に反対する政治家や軍部は、共和制への移行支持へと変化していった。この過程で、ヴェニゼロスは反君主制の方向に向かい、戦術的に共和制への移行を支持する立場をとることで、反ヴェニゼロス派の影響力を抑えようとした (Papacpsma 1977: 201-2)。

### 3.3 民衆運動空間

#### 3.3.1 「自由主義」的な改革の推進

民衆運動空間を対象とする研究として、まずギリシャにおける「自由主義」と国民国家形成の関係に関するアンドレオプロスの研究を取りあげる (Andreopoulos 1981, 1989)。アンドレオプロスは、ヴェニゼロスがギリシャを後進的な状況から脱却させ、西欧国家のような近代化を実現するために、憲法改正をはじめとする「自由主義」的な改革に訴えかけることで、民衆の支持を得ることに成功したと指摘している (Andreopoulos 1989: 213)。

「メガリ・イデア」に基づくギリシャにおける政治と社会の紐帯は、1897年の対オスマン帝国戦争の敗北によって断ち切られていた (Andreopoulos 1989: 199)。この敗戦により旧来の政治体制を変革する必要性が明らかになっていた当時、ヴェニゼロスは政治改革の必要性と領土拡張政策の推進の密接な関係を強調した (Andreopoulos 1989: 209-13)。第一次世界大戦参戦を巡る政治指導者間の対立の中では、ヴェニゼロスは「自由主義」に基づく改革の達成のために、領土拡張の必要性を主張し、民衆からの支持を得て参戦の準備を進めたのである (Andreopoulos 1989: 213-5)。

#### 3.3.2 社会主義運動への対応

次に、外交史研究者として取り上げたレオンは、1914年から1918年にかけてのギリシャにおける社会主義に関する研究も行っている (Leon 1976, 1978)。そこでは、ギリシャにおける社会主義運動の変遷に焦点を当てて、ヴェニゼロスが労働者からの協力を取り付けられた背景が明らかにされている。

この時期は、様々な社会主義者のグループが合流に向かい、組織化が進んでいった。レオンは、第一次世界大戦中のギリシャにおける社会主義者の態度の多様性に注目している (Leon 1976: 26-30)。すなわち、ギリシャが参戦することは社会主義の原則に矛盾していないと考え、ヴェニゼロスの政策を支持する社会主義者が存在した。他方で、ギリシャの労働者階級の中には、第一次世界大戦を「ブルジョア」の戦争と見なし、ヴェニゼロスの領土拡張政策に疑問を呈した人々もおり、彼らは中立を主張する国王コンスタンディノス一世派に協力していた (Leon 1976: 32-3)。

第一次世界大戦後、ヴェニゼロスと社会主義者の協力関係は解消に向かった。その理由は二点あった。第一の理由は、戦争の長期化による社会主義の急進化である。特に、パリ講和会議にギリシャの全権代表として出席したヴェニゼロスの領土要求が大国に翻弄されたことは、ギリシャ国内における厭戦感情を強める契機となった。その結果、社会主義者はヴェニゼロスのもとから離れていった (Leon 1976: 188)。

第二の理由は、外部要因としてのロシア革命の影響である。ロシア革命の発生によって、ギリシャ国内でも社会主義運動が急進化した。1918年11月にギリシャ社会主義労働党が結成された。この党は、二年後にギリシャ共産党に名称を変更し、コミンテルンに加盟した。ギリシャでは、第一次世界大戦とロシア革命の影響によって、分裂していた社会主義運動が統一に向かったのである (Leon 1976: 116-20)。

#### 3.3.3 シンボル化

第三に、ヴェニゼロスが同時代の他の政治家よりも、民衆からの支持を多く集められた背景について分析した研究がある。ヴェニゼロス

と同じ新世代に属する政治家と比較したマゾワーによれば、ヴェネゼロスは「メガリ・アイデア」のビジョンに自らを重ね合わせ、民衆の心をつかむ宗教的教義や過去の栄光に訴えることによって政治的成功を収めた（Mazower 1992：897-904）。すなわち、ヴェネゼロス自身が「メガリ・アイデア」推進のシンボリック的存在となったのである（Mazower 1992）。

他方で、ヴェネゼロスの台頭は、「エスニコス・ディハズモス」の基礎となる反対派の形成を促進することになった。ヴェネゼロスによる革新的でリスクの高い政策に対抗し、旧来の政治家たちは反ヴェネゼロス派を形成し、保守的政策を展開した（Mazower 1992：899）。しかし、反ヴェネゼロス派はバルカン戦争時の「国民の熱狂」や外交の複雑なバランスを政策に反映できず、ヴェネゼロスほどの民衆からの支持を獲得できなかった（Christopoulos 2015）。

### 3.4 考察

先行研究を国際政治空間、政治エリート空間、民衆運動空間の三つの政治空間に整理した結果、ヴェネゼロスは複数の政治空間において様々な政治課題に対応しながら、領土拡張政策を推進していたことが明らかになった。ヴェネゼロスは、各政治空間に対応した政治指導者の「顔」を持っていたのである。すなわち、国際政治空間では「外交指導者」、政治エリート空間では「為政者」、そして民衆運動空間では「扇動者」としての「顔」である。

まず、「外交指導者」としてのヴェネゼロスは、国際政治の「現実」において、ギリシャが領土拡張を自力で達成できず、大国に影響されることを認識していた。ヴェネゼロスは、イギリスのオスマン帝国に対する帝国主義政策に乗じて「メガリ・アイデア」の実現を志向していた。また、他の大国のギリシャ国内政治に対する干渉は、領土拡張政策の推進において無視できなかった。すなわち、イギリスからの協力を確保していたとしても、ドイツから影響を受けている国王コンスタンディノス一世や「親ドイツ派」の参謀らとの外交政策決定過程における対立に対応せざるを得なかった。

次に、「為政者」としてのヴェネゼロスは、軍部の派閥、未発展な国内経済に起因するクラ

イエンテリズム、そして国内の社会的亀裂などに対応していた。政治指導者間の対立やイデオロギーの衝突として表出している「エスニコス・ディハズモス」の背景には、ギリシャにおける社会的亀裂が存在していたのである。政治エリート空間における権力闘争の中で、ヴェネゼロスはクライエンテリズムを再生産することになった。

最後に、「扇動者」としてのヴェネゼロスは、「自由主義」的な政策を推進し、社会主義運動に対応することで、民衆からの支持獲得を目指した。ヴェネゼロスと対抗する他の政治家との比較を行っている研究では、ヴェネゼロスは「メガリ・アイデア」を達成できる政治指導者として振る舞うことで、民衆からの支持を得ることに成功したことが明らかにされている。しかし、第一次世界大戦後のギリシャ国内における厭戦感情の広まりによって、ヴェネゼロスは民衆からの支持を失っていったのである。

## 4. おわりに

本稿では、政治指導者ヴェネゼロスが領土拡張政策を推進した政治的環境について、イレデンティズムと政治指導者の関係という分析視角を用いて、英文の先行研究の整理を行った。その結果、国際政治空間ではイギリスの帝国主義政策に追従し、政治エリート空間では物質的利益に依拠する権力闘争を行い、そして民衆運動空間では「メガリ・アイデア」を駆使することによって民衆からの支持を集めながら、ヴェネゼロスは領土拡張政策を推進したことが明らかになった。

しかし、本稿で分類した三つの政治空間を個々に分析するだけでは、イレデンティズムを推進する際に現出するイデオロギーと物質的利益という二点の関心事が、社会的分断と政治変動にどのように関連しているかを特定できない。この問題を解決するためには、国際政治空間と国内政治空間における政治エリート空間と民衆運動空間という三つの空間を架橋し、それらの相互関係の変化を解明できる視角が必要となってくる。この視角を確立することが、ギリシャにおける政治的ダイナミクスを解き明かすための道を開くことになるのである。



## 参考文献

## 【日本語文献】

- 小林正弥 (2008) 「公共主義的政治腐敗論」河田潤一 (編) 『汚職・腐敗・クライエントリズムの政治学』 3-37、ミネルヴァ書房。
- 月村太郎 (2001) 「ネーションにおけるメンバーシップと領域」北海道大学スラブ研究センター 『スラブ研究センター研究報告シリーズ (東欧・中央ユーラシアの近代とネーション I)』 80、15-25。
- 月村太郎 (2013a) 「地域紛争をどう見るか」月村太郎 (編) 『地域紛争の構図』 1-16、晃洋書房。
- 月村太郎 (2013b) 『民族紛争』 岩波書店。
- 藤嶋亮 (2014) 「南東欧諸国における寡頭的議会制からの移行ー ルーマニアとブルガリアの比較から」『日本比較政治学会年報』 16、129-55。
- 村田奈々子 (2012) 『物語 近現代ギリシャの歴史』 中央公論新社。

## 【外国語文献】

- Ambrosio, T. (2001) *Irredentism: Ethnic Conflict and International Politics*, Westpor.
- Ambrosio, T. (2011) Irredentism. In B. Badie, D. Berg-Schlosser, and L. Morlino (eds.) *International Encyclopedia of Political Science*, Vol. 5, 1346-8, Sage.
- Andreopoulos, G. (1981) State and Irredentism: Some Reflexions on the Case of Greece. *The Historical Journal*, 24(4), 949-59.
- Andreopoulos, G. J. (1989) Liberalism and the Formation of the Nation-State. *Journal of Modern Greek Studies*, 7, 193-224.
- Ben-Israel, H. (1991) Irredentism: Nationalism Reexamined. In N. Chazan, (ed.) *Irredentism and International Politics*, 23-35, Lynne Rienner Publishers.
- Carment, D., and James, P. (1995) Internal Constraints and Interstate Ethnic Conflict: Toward a Crisis-Based Assessment of Irredentism. *The Journal of Conflict Resolution*, 39 (1), 82-109.
- Chazan, N. (1991) Irredentism, Separatism, and Nationalism. In N. Chazan, (ed.) *Irredentism and International Politics*, 139-51, Lynne Rienner Publishers.
- Christopoulos, M. (2015) Anti-Venizelist Criticism of Venizelos' Policy during the Balkan Wars (1912-13). *Byzantine and Modern Greek Studies*, 39 (2), 249-65.
- Couloumis, T. A., Petropoulos, J. A., and Psomiades, H.J. (1976) *Foreign Interference in Greek Politics*, Pella.
- Dakin, D. (1972) *The Unification of Greece, 1770-1923*, Benn.
- Gerwarth, R. (2016) *The Vanquished: Why the First World War Failed to End, 1917-1923*, Allen Lane. (= 2019、小原淳訳『敗北者たちー第一次世界大戦はなぜ終わりに損ねたのか 1917-1923』みすず書房。)
- Horowitz, D. L. (1985) *Ethnic Groups in Conflict*, University of California Press.
- Horowitz, D. L. (1991) Irredentas and Secessions: Adjacent Phenomena, Neglected Connections. In N. Chazan, (ed.) *Irredentism and International Politics*, 9-22, Lynne Rienner Publishers.
- Kalyvas, S. N. (2015) *Modern Greece: What Everyone Needs to Know*, Oxford University Press.
- Kitomilides, P. M. (ed.) (2006) *Eleftherios Venizelos: The Trials of Statesmanship*, Edinburgh University Press.
- Kornprobst, M. (2008) *Irredentism in European Politics: Argumentation, Compromise and Norms*, Cambridge University Press.
- Leon, G. B. (1974) *Greece and the Great Powers: 1914-1917*, Institute for Balkan Studies.
- Leon, G. B. (1976) *The Greek Socialist Movement and the First World War: The Road to Unity*, Columbia University Press.
- Leon, G. B. (1978) The Greek Labor Movement and the Bourgeois State, 1910-1920. *Journal of the Hellenic Diaspora*, 4(4), 5-28.
- Leontaritis, G. B. (1990) *Greece and the First World War: From Neutrality to Intervention, 1917-1918*, Columbia University Press.
- Linz, J. J., and Stepan, A. (1996) *Problems of Democratic Transition and Consolidation Southern Europe, South America, and Post-Communist Europe*, The Johns Hopkins University Press. (= 2005、荒井祐介・五十嵐誠一・上田太郎訳『民主化の理論ー民主主義への移行と定着の課題』一藝社。)
- Llewellyn-Smith, M. (1998) *Ionian Vision: Greece in Asia Minor 1919-1922*, Hurst and Company.
- Llewellyn-Smith, M. (2006) Venizelos' Diplomacy, 1910-23: From Balkan Alliance to Greek-Turkish Settlement. In P. M. Kitromilides (ed.) *Eleftherios Venizelos: The Trials of Statesmanship*, 134-192, Edinburgh University Press.
- Llewellyn-Smith, M. (2021) *Venizelos: The Making of a Greek Statesman, 1864-1914*, Hurst and Company.
- Mavrogordatos, G. Th. (1983) *Stillborn Republic: Social Coalitions and Party Strategies in Greece, 1922-1936*, University of California Press.
- Mazower, M. (1992) The Messiah and the Bourgeoisie: Venizelos and Politics in Greece, 1909-1912. *The Historical Journal*, 35(4), 885-904.
- McMahon, P. (1998) *The Quest for Unity: Divided Nation and Irredentist Ambitions*, Ph.D. dissertation, Columbia University.
- Mouzelis, N. P. (1978) *Modern Greece: Facets of Underdevelopment*, Macmillan.
- Mouzelis, N. P. (1986) *Politics in the Semi-Periphery: Early Parliamentarism and Late Industrialization in the Balkans and Latin America*, Macmillan.
- Papacosma, S. V. (1977) *The Military in Greek Politics: The 1909 Coup d'états*, The Kent State University Press.
- Papacosma, S. V. (1981) The Republicanism of Eleftherios Venizelos: Ideology or Tactics?. *Byzantine and Modern Greek Studies*, 7 (1), 169-202.
- Saideman, S. M., and Ayres R. W. (2000) Determining the Causes of Irredentism: Logit Analyses of Minorities at Risk Data from the 1980s and 1990s. *The Journal of Politics*, 62(4), 1126-44.
- Saideman, S. M., and Ayres R. W. (2008) *For Kin or Country: Xenophobia, Nationalism, and War*, Columbia University Press.

- Siroky, D. S., and Christopher, W. H. (2017) Inside Irredentism: A Global Empirical Analysis. *American Journal of Political Science*, 61(1), 117-28.
- Smith, A. D. (1986) *The Ethnic Origins of Nations*, Blackwell. (= 1999、巢山靖司・高城和義・河野弥生・岡野内正・南野泰義・岡田新訳『ネイションとエスニシティー-歴史社会学的考察』名古屋大学出版会。)
- Smith, A. D. (2010) *Nationalism: Theory, Ideology, History*, 2<sup>nd</sup> ed, Polity Press. (= 2018、庄司信訳『ナショナリズムとは何か』筑摩書房。)
- Stouraiti, A., and Kazamias, A. (2010) The Imaginary Topographies of the Megali Idea: National Territory as Utopia. In P. N. Diamandouros, Th. Dragons, and C. Keyder (eds.) *Spatial Conceptions of the Nation: Modernizing Geographies in Greece and Turkey*, 11-34, Tauris Academic Studies.
- Trachtenberg, M. (2006) *The Craft of International History: A Guide to Method*, Princeton University Press.
- Veremis, Th. (1997) *The Military in Greek Politics: From Independence to Democracy*, Black Rose Books.
- Veremis, Th. (2006) Venizelos and Civil-Military Relations. In P. M. Kitomilides (ed.) *Eleftherios Venizelos: The Trials of Statesmanship*, 273-83, Edinburgh University Press.
- Weiner, M. (1971) The Macedonian Syndrome: A Historical Model of International Relations and Political Development. *World Politics*, 23(4), 665-83.

## 謝 辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2129 の支援を受けたものである。